【地域連携報告】

がんばれ、小学生。未来の博士を応援！

――水田記念図書館学生アドバイザーの活動報告――

大澤和真[1]・清水勇斗[2]・本間大翔[3]・松下純也[4]
吉田瀬里菜[5]・渡部拓真[6]・山口直美[7]

キーワード：公共図書館、城西大学水田記念図書館学生アドバイザー、小学生、図書館を使った調べる学習コンクール

１．はじめに

本学には創立者故水田三喜男初代理事長の偉業を顕彰して「水田記念図書館」（以下、「図書館」）と命名された、大学図書館がある。図書館は1978年８月にそれまで分置されていた人文・社会科学系と自然科学系の各図書室を統合し、キャンパスの中央に大学の中枢の象徴として建設された。その後1993年には、蔵書数の増加と情報化時代に対応する機能を備えるための改装を行い、2008年には５階、６階、９階を閲覧席とグループ学習室に改装、2018年には７階、８階をラーニングコモンズに改装し、現在の姿となった。

学生アドバイザー制度は、2012年に学生が自らの経験を生かし、学生に寄り添ったアドバイスをすることを目的に成立された。教員の推薦を受けた学生が図書館長に委嘱され、図書館学生アドバイザー」（以下「学生アドバイザー」）として、図書館１階、３階、７階の相談席に常駐し、図書館利用や資料検索のサポートを行っている。文理を問わず、様々な学部の上級学生と大学院生が在籍しており、2023年度は18名のメンバーが業務にあたっている。主な業務である学習支援では様々な学生から相談を受け、時には図書館職員と連携を図りながら、学生が図書館を快適に使えるように、また大学生活を不安なく送れるように相談に応えている。その他、毎週行っているアドバイザー会議では、相談内容を共有し対応についての振り返りを図書館員と共に行い、より質の高い相談対応ができるようにしている。

この業務と並行して、イベントの企画や運営も行っていて、季節に合わせて図書館内を装飾したり、おすすめ本を選書しPOPと共に展示したりしている。学生アドバイザーが企画しているイベントのひとつに、ライブラリーラウンジがある。このイベントは「学部・学科を超えた交流を図る」ことを

1　城西大学大学院理学研究科物質科学専攻２年
2　城西大学経済学部経済学科３年
3　城西大学経済学部経済学科４年
4　城西大学経営学部マネジメント総合学科４年
5　城西大学現代政策学部社会経済システム学科３年
6　城西大学経営学部マネジメント総合学科３年
7　城西大学水田記念図書館事務職員

目的として2014年から始まり、時には図書館を飛び出し、大学構内で多様なジャンルのイベントを計26回（2023年12月現在）にわたり開催してきた。５学部からなる総合大学の強みを生かし、地域の方や学生、教職員に協力いただき、ユニークな企画を実施することで、図書館や学生アドバイザーのことを知ってもらい、図書館をより多くの方に利用してもらう機会になればと取り組んでいる。

2023年７月下旬から８月上旬にかけて地域連携の重要な活動として、坂戸市立図書館における「図書館を使った調べる学習コンクール応援講座」を実施した。本稿ではこの活動の様子を報告するとともに、このイベントを客観的に分析し、今後の学生アドバイザーの活動がより有意義なものとなるようにつなげていく。

２．図書館を使った調べる学習コンクール応援講座

２．１　経緯とコンクールについて

令和４年度の坂戸市立図書館協議会において、委員である本学図書館職員に「図書館を使った調べる学習コンクールに向けた講座を学生アドバイザーにお願いしたい」と打診が入ったのが始まりだった。

この「図書館を使った調べる学習コンクール」とは、公益財団法人図書館振興財団が主催する学習普及を目的とした取り組みで、「調べる学習部門」、「調べる学習支援・指導部門」があり、小学生や高校生だけでなく、学校や公共図書館に所属する個人や団体も応募することができる。このコンクールは全国コンクールの前に地域コンクールが開催され、自分の住む地域でコンクールが開催される場合は地域コンクールに応募しなければならない。埼玉県坂戸市では坂戸市立図書館主催の「第10回坂戸市図書館を使った調べる学習コンクール」が開催され、今回はこの坂戸市のコンクールへの応募を目指して学習する小学生を対象に応援講座を開講した。坂戸市のコンクールでは「図書館を使った調査・研究（調べる）学習の普及」、「図書館の資料をはじめ様々な情報を調べる学習を通じて、児童・生徒が自ら考え、判断し、表現する力を育む」、「また、その活動を通して坂戸市の公共・学校図書館での調べ方を体得し、有効に活用する力を養う」の４点が開催の目的とされた[8]。2022年もこの講座は開講されたが、その際には坂戸市、あるいは坂戸市近辺に住む異なる大学の学生が講師を務めた。2022年の講座は好評だったそうだが、「所属する大学が異なり、大学生間でのスケジュール調整や準備が困難だった」、「2023年も継続して講師を依頼することが難しい」、「2024年以降も継続して講師をすることができる団体に講師を依頼したい」という坂戸市立図書館の要望が本学の図書館を通じて学生アドバイザーに伝えられた。応援講座を引き受けるかについて学生アドバイザー会議で話し合い、コロナ禍により地域での活動が制限されていた後ということもあり、図書館の学生アドバイザーとして、城西大学の学生として「地域社会に貢献したい、大学の地元で活躍したい」という気持ちがメンバー内で一致し、引き受けることとなった。

8　第10回「坂戸市図書館を使った調べる学習コンクール」募集要項に掲載されていた坂戸市独自のコンクール目的。

２．２　準備

７月22日（土）に財団からの講師による講座初日が決まっていたので、４月28日（金）に本学図書館において坂戸市立図書館との会議を行い、講座の日程、趣旨や目的、学生アドバイザーに求める指導内容の確認などを行った。応募にあたっての作品のテーマは自由であり、「身近での疑問、興味に感じていることをテーマとする小学生が多い」、作品形態も自由だが、「Ｂ４サイズまでの大きさの紙に50ページ程の冊子形態の作品が多い」などの情報を頂いた。昨年の講座では、準備が足らず、指導内容の共有が出来ていなかったため、参加者の作品の構成、文言、言い回しが似たものになってしまった。それにより、作品に個性が見いだせなかったことが昨年度の改善点として挙げられた。この課題を踏まえたうえで、昨年の講座の内容は意識せず、我々ならではの方法により小学生の成長につながる思い出にしたいという、今年度の方向性が定まった。

まずは、講座当日に小学生へ配布する資料作りから始めた。参加対象が３年生から６年生と学年の幅が広いことから、漢字や言い回しは理解しやすい言葉を使い、誰が見ても情報が伝わる資料作りを意識した。また、著作権、肖像権、情報の信憑性、情報の引用など作品を作るうえで避けては通れない注意点を小学生にわかりやすく伝えるにはどうすればよいかなど、難しい点について検討した。最終的には、資料に載せる情報は限りなく少なくし、なるべくかみ砕いた言葉遣いを心掛け、資料を作成した。

本講座の最終的な目標は「小学生が自主的に学習できるようにすること」であり、「作品を完成させること」ではないということも学生アドバイザー間で共有した。本講座で小学生が「調べる力、学ぶ力、情報をまとめる力」を育成できるように心掛け、必要に応じて宿題や課題を出し次回へつながるヒントを与えるなど、講座外での時間で学習できるようにすることも共有した。

小学生と信頼関係を築く、質問に答えやすくするという観点から、４日間を通して学生アドバイザーはできるだけ同じ小学生を担当するようにスケジュールを立てた。担当する学生アドバイザーが変わる場合は事前に引継ぎを行い、小学生に影響が出ないようにすることも共有した。

（1）　（2）　（3）

図２．１　調べる学習コンクール応援講座で配布した冊子の一部

２．３　令和５（2023）年度の実施概要

【講座名】　楽しもう！図書館を使った調べる学習コンクール応援講座
【日程】　2023年７月22日（土）、７月25日（火）、７月30日（日）、８月４日（金）
【時間】　９：30～12：00　但し、７月22日（土）　のみ15：15～16：15
【場所】　坂戸市立図書館　２階視聴覚室
【連携主催】　坂戸市立図書館
【対象】　小学３年生～６年生
【参加者数】　小学生７名、学生アドバイザー11名、教職員６名（講師、坂戸市、城西大学）
※2023年７月22日（土）の財団からの講師 中村伸子氏による講義後に引き継ぐ形で実施

２．４　講座の実施

講座の日程も決まり、学生アドバイザーの参加メンバーと７人の小学生の参加が決まった。参加する小学生が思っていたより少なかったため、１人の小学生に１人の学生アドバイザーが担当するマンツーマンで計４日間の活動を行なった。

１日目は、財団からの講師による講座を小学生と一緒に受講したのち、応援講座を開始した。はじめに、事前に用意したマインドマップを使い、実際に調べるテーマを決めることから始めた。学生アドバイザーが小学生の興味のあるトピックを引き出せるように積極的にコミュニケーションをとりながら作業を進めたが、普段、接する機会のない小学生と大学生だったため、学生アドバイザー、小学生の両者が緊張していた。そのため、１日目はコミュニケーションをとることで終わり、作業が進まないペアが多くいた。また、３年生から６年生と学年での差があるため作業の進捗に差が生まれてしまった。その日の振り返りでもコミュニケーションや進捗状況の差が２日目以降の課題として挙げられた。

図２．２　財団講師による講座を受講

図２．３　調べる学習コンクール応援講座の様子

２日目は、宿題を設定して進捗に合わせた作業を開始した。１日目の反省を生かし、小学生との積極的なコミュニケーションと学生アドバイザー間での進捗状況の共有を図りながら作業に取り組んだ。多くのペアが１日目のマインドマップを使って決定したテーマをもとに図書館で参考になる資料を探す作業を行った。図書館の限られた資料からテーマに合った資料を見つけることに小学生は苦戦していたが、学生アドバイザーがヒントを与えることで少しずつ資料を見つけられるようになっていった。

中には、資料が十分に見つけられなかったためにテーマを修正するペアもいたが、順調に作業が進行しているペアがほとんどだった。次に資料の内容をまとめ、調べた内容をピックアップする作業を行った。これらの作業は、学生アドバイザーが事前に用意した調査用ワークシートを使いながら行われた。小学生は、このワークシートを使うことで本の基本的な情報だけでなく、本を読んでわかったことや思ったこと、さらに深掘りしたい内容を簡単にまとめることができた。また、コミュニケーションがとれるようになったことでスムーズに作業が進行するようになった。その甲斐もあり、３日目や４日目には実際に内容をまとめてコンクールに出す作品の作成に取り掛かっている小学生もいた。

図２．４　PC で館内の本を検索中

図２．５　本を探している様子

最終日の４日目の講座後には表彰式を行い、４日間頑張った小学生へメダルを贈呈し記念撮影を行った。メダルの裏には、小学生の頑張りを称え、楽しかった思い出となるよう、担当した学生アドバイザーからのメッセージを記した。表彰式後も学生アドバイザーと小学生が楽しそうに談話をし、別れを惜しむペアも見受けられた。この様子から、小学生にとって大学生との活動が学習能力向上以上に対人関係能力、コミュニケーション能力にも影響を与えたと言える。

４日間を終えた時点では、それぞれの小学生の学年や取り組み方により、作品の進捗状況に差が出た。作品が完成間近の人もいれば、本の情報をまとめている途中の人もいた。進捗状況はそれぞれだが、小学生、学生アドバイザーともに充実した４日間を終えることができた。

図２．６　メッセージ入りのメダル

図２．７　メダルのプレゼント

３．評価

「図書館を使った調べる学習コンクール応援講座」に参加した小学生と学生アドバイザーに対して、後日アンケートを実施した[9]。ここではその結果の一部について報告したい。

３．１　小学生の声（アンケートによる）

表１：小学生アンケート結果

2023年度　楽しもう！図書館を使った調べる学習コンクール 応援講座　アンケート					
1．イベントの感想を教えてね！					
①楽しかったこと	本探し、調べたこと、切ってはったこと。	いろいろな大学生とおしゃべりしたこと。	目的に合った本をさがすこと。	・話してくれたこと。 ・インタビューすること。	文を書いて、どんどん自分の作品になっていく所。
②役に立ったこと	こんどまたこれをやるときのやり方が分かった。	〇〇のことを知れた。	調べる時にはどのような感じで行うかについての手順	・本のさがし方 ・テーマの決め方 ・大学生が話してくれたこと全部	文を書いていくコツ。
③大変だったこと	テーマに合った本をさがすこと。	調べてかきうつすこと。	どこをメモすれば、調べたい事について知れるか考えること。	・まとめること ・〇〇の資料、本探し ・タイトル、テーマを考える。	たくさんの字をかいて文を作ることが大変だった。
2．大学生との活動はどうだった？					
①わかりやすかったこと	説明がわかりやすかった。	本番にはるとき、どこになにをはればいいか。	ぎもんに思ったことやわからなかった所をていねいに説明してくれたこと。	大学生のお兄さん、お姉さんたちの説明。（特に、テーマの決め方）	こうやって書くといいんじゃない、とおしえてくれて、わかりやすかった。
②もっと手伝ってほしかったこと	〇〇のかたちをもっと手伝ってほしかった。	分かりやすくおしえてほしい。	なし	なし	行くかい数をもっと増やしてほしかった。
3．大学生とどんなイベントをしたい？					
	もっとむずかしいことをしらべられるイベントをしたい。	またこれをしたい。	おすすめの本をしょうかいしあう。	・スポーツ大会 ・お祭り ・楽しいこと	・本こうかんイベント ・本作りをする。
	※小学生7名のアンケートを抜粋、一部加工して作成				

上記の表から、様々な苦労がありながらも、本講座に対し、肯定的な感想をもった小学生が多くいることが確認できた。なかでも、「大学生と話すことが楽しかった」、「大学生が話してくれた全部が役に立った」、「大学生の説明がわかりやすかった」など、大学生との関わりに関しての肯定的な感想が目立った。さらに、講習回数を増やしてほしいという意見からもわかる通り学習へのモチベーションを引き出し、目的や知りたいことに対しての調べ方や知識を得ることの喜びを小学生に理解してもらえたことが本アンケートの結果からも理解できる。また、「大学生とどんなイベントをしたいか」という質問に対しては、今回の講座の継続や新規の別ジャンルのイベントの開催を求める声が多く、

9　アンケートは小学生用と学生アドバイザー用の２種類を用意した。前者には楽しかったことや大変だったことについての項目、後者は小学生との活動で感じたことや会話をする上で工夫した点、改善点などについての項目を設けた。

今後も大学生と交流したいという気持ちを知ることができた。

３．２　学生アドバイザーの声（アンケートによる）

［分かりやすく伝えるために工夫したこと］

・伝える際の表現。ゆったりと話した。難しい単語は使わない
・小学生目線で話す
・話していて楽しいと思えるような話をする
・やらなくてはならないことをメモに書いた

［大変だったことや難しいと感じたこと］

・興味ややる気を出させること、集中力を維持させること
・大学生に委縮し伸び伸び作業できていない子がいた
・何のためにこの学習をしているか理解させること
・アドバイスの線引き

［講座の必要回数］

・４回、５回、６回、８回

［感じたこと・得たこと］

・本を読んだ感想や何気ない発言が奇想天外で面白かった
・興味を引くことの大変さ
・小学生と交流することの楽しさ
・感謝の言葉をもらい頑張ってきてよかったと思えたこと

［講座を次年度行う場合の改善点など］

・やるべきことをリスト化しそれぞれのペースで作業を進める
・回数をもう少し増やす
・開始前にコミュニケーションをとる
・手助けの範囲を予め考えておく

［その他］

・小学生の人数が多い場合はマンツーマン形式ではなくアドバイザーが巡回してその都度対応する形式にする

※学生アドバイザー11人のアンケートから一部抜粋

上記の意見から、小学生のテーマがバラエティに富んでおり、学生アドバイザーもどうサポートし

ていいか、迷いがあった人がいたことがわかった。また、「大学生に委縮し、伸び伸び作業できていない児童が散見した」、「小学生の興味を引くことの大変さを感じた」という声もあった。年齢が離れたなかでのコミュニケーションや手助けの範囲の線引きには苦労した。それでも、小学生の学習力向上を目指し、懸命にサポートした経験は学生アドバイザー自身の大きな財産となった。小学生同様、全体的には本講座に対し、肯定的な意見が多く、次回以降の講座開催を見据え、多くの有意義な改善点が提示された。

４．考察

上記で挙げた評価を基に考察を行う。「３．評価」から２つの問題点が考えられた。

１つ目の問題点は、講座日数が足らなかったことである。参加者へのアンケートを見ても「回数を増やすべき」という意見が小学生と学生アドバイザーの両者に共通して挙げられた。今回は４日間の講座を行い、講座後の時間に小学生が「自らの力で」作品をまとめられるようにすることを目標にしていた。しかし、学年によって集中力が継続できないことや、それぞれの学年にあった本を探すことができず、作品の進捗状況に差が生まれた。それにより、最終日の講座で仕上げに取りかかることができた小学生は数人であった。完成させることが講座の目的ではないが、小学生が少しでも自主的な学習がしやすくなるように、講座回数を増やすなどして、より手厚いサポートが出来ればよかった。ただ、１回当たりの講座時間に関しては今回の時間（１回あたり、２時間半）がちょうどよいという意見が多く、小学生の集中力を考慮して、短時間で学習することが効果的と感じた学生アドバイザーが多かった。また、時間や回数にフォーカスするのではなく、限られた時間の中で小学生が「それぞれに合わせた目標を設置」し、ゴールを明確化することが大事だと感じた。そうすることにより学習意欲を掻き立て、モチベーション維持に繋がっていくと思われる。

２つ目の問題点は、小学生との関わり方である。学生アドバイザーへのアンケートでは、「興味を引くことや働きかけることが大変で、小学校の教職員の方々に対して尊敬の気持ちが芽生えた」、「普段は小学生と接する機会が無いことから言葉選びには苦労したが、同時に交流することの楽しさを感じることができた」など、小学生との関わりについて苦労したという回答が挙げられていた。小学生と話す中で、複雑な言葉を使用しないこと、早口にならないこと、話す態度や話し方など、普段あまり気にかけないことに気を遣うことが多くあった。また、小学生側も大学生の存在に委縮し、思うように活動ができていない様子の児童もいた。そのため、小学生とのコミュニケーションが難しかったと言う声が多く挙がった。ただ、小学生と学生アドバイザーの両者が「話すことができて楽しかった」という意見を多く挙げており、全体を通して、コミュニケーションに苦戦しながらも、交流を楽しんでいる様子がアンケートからも窺える。コミュニケーションに苦戦しないようにするには、講座前に小学生とレクリエーションなどの交流の時間を作る、講座とは別に交流の機会を作ることなどが挙げられ、小学生と接する機会を増やすことが重要であると感じた。

５．おわりに

事前情報が少なくどのように進めたらよいかがわからない中で、何が小学生にとって最善かを学生アドバイザーが一丸となって考えながら臨んだ本講座であった。初めての試みで、勝手が分からない中での準備や、講座での対応は大変だったが、普段交流の少ない小学生への学習支援は、同年代の学生や社会人と関わるだけではできない経験や苦労を味わい、成長できる時間だった。自分たち大学生が当たり前に理解できることを小学生に教える難しさや、小学生の興味関心や個性を引き立てながら適切に介入しサポートすることの難しさを、参加した学生アドバイザー全員が感じた。これらの経験から、相手の目線に立って歩み寄る姿勢や、自分の型にはめず、興味関心を尊重して好奇心を掻き立てる柔軟な考え方を培うことができた。

今回の評価できる点として、最大16歳差がある中で学生アドバイザーが小学生と向かい合い、説明や作業配分を行いスムーズに学習支援を行えるようにしたことが挙げられる。さらに、本講座受講者のうち４名が「第10回坂戸市図書館を使った調べる学習コンクール」（今年は11校の学校から54作品が応募された）において入選を果たすことができた。結果が全てではないが、私たちがサポートした小学生が受賞できたことは大変嬉しく思うと同時に、応援講座の成果があったことを認識することができた。

講座から数か月が経ち、季節が冬へと移り変わった2023年12月某日、坂戸市立図書館のご厚意により、入賞作品のレプリカを拝見する機会を頂いた。参加した小学生全員が講座内で完成させることができなかったため、学生アドバイザー一同が作品に関心を示していた。レプリカ作品を見て、学生アドバイザーのほとんどがその完成度の高さに驚いた。作品が見やすくまとまっているのはもちろんだが、作品に記載されている学習内容の質も高く、その資料を読んだ学生アドバイザーが知見を得られるほどの作品が多かった。作品の中には、家庭で実験を行ったり、埼玉県内、県外の遠方へ出向き、現地調査を行ったり、調べているテーマに関する人物のもとへ行きインタビューしていた作品があった。これは小学生自身が自分のテーマに対し、主体的に学びを深めている証拠であり、ここまでアクティブに学習を進めていたことに感心した。入賞した小学生を担当した学生アドバイザーからは、「講座終了時の状態とは見違えるほど、作品が仕上がっていて驚いた」、「自分のアドバイスが作品に反映されていて嬉しい」、「調べる情報をまとめる段階で講座が終わってしまい、作品は初めて見たが、講座時に調べた情報を見やすく、わかりやすくまとめられている」などの意見が挙がった。この意見から、小学生の多くが本講座の趣旨であった、「小学生が自主的な学習をできるようにする」ことが体現できたと言える。講座の時間内で学習のコツや仕方を学び、それを講座外の時間で実践するという私たちが理想としていた学習を展開することが出来た。

本講座により実際に坂戸市立図書館を通して地域の小学生との交流ができた点は、学生アドバイザーにとって大変有意義だったと考える。前例のなかった公立図書館との合同企画により学生アドバイザーの活動の幅が広がったことはもちろんであり、私たちの今後の活動についての課題や問題点、次回開催にあたっての改善点も多く発見することができた。

本講座の経験を基に、今後も地域交流できる企画を考案していき、実際に実現させていきたいと考

えている。本稿を過去のデータとして記録しておくだけにとどまらず、今後の学生アドバイザー活動の糧としていきたい。

参考URL

＜インターネット＞

１）公益財団法人図書館振興財団　『図書館を使った調べる学習コンクール　募集要項』（https://concours.toshokan.or.jp/youkou/）（2024年１月10日）.

２）城西大学水田記念図書館　（https://libopac.josai.ac.jp）（2024年１月10日）.

３）城西大学水田記念図書館 学生アドバイザー（https://libopac.josai.ac.jp/apply/adviser.html）（2024年１月10日）.